

Title	滋賀縣八幡町史(滋賀縣八幡町發行)
Sub Title	
Author	渡邊, 基
Publisher	三田史学会
Publication year	1941
Jtitle	史学 Vol.20, No.1 (1941. 7) ,p.183- 184
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19410700-0183">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19410700-0183</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

隊から私等は、常によい資料に飢えてゐる。もし本書の刊行が機縁となつて、更に華山に關する新しい資料を知ることが出來ようなら、いかばかり嬉しからう」とさへ言はれてゐる。それはさもあるべきことである。筆者も亦著者の爲にも新史料の出現を祈りたいと思ふ。そしてそれによつて傳記研究の一層の躍進を期待するものである。しかし筆者は、人物研究の前進は決して新史料の出現のみによつて行はれるものではないと考へる。既存の史料へのより深い理解こそ、最も重要な課題だと思ふのである。

その場合人物の全面に對して眼を注がねばならないこと勿論である。また華山について言へば、この書の記述だけでは、何故あれ程至誠な華山が檢舉され幽閉されねばならなかつたか、更に何故自らの命を断たねばならなかつたか、明にされてはゐない。これを判らせるためには華山の學問・その述作に對する理解や、田原藩侯繼嗣問題・藩政に於ける華山の位置役割の説明が爲されねばなるまい。それは畢竟學者としての華山、政治家としての華山を扱ふことになるわけである。それなくしては華山傳は十全なものとはなり得ない。

筆者は傳記研究がその道の人々によつて眞摯に行はれ、見るべき成果を擧げて居りながら、學界に認められる所尠いのを、日頃遺憾なことに思つてゐる。それは傳記研究者のために惜しまれるばかりでなく、その成果が充分に歴史學界に汲み取られてゐないのを残念に思ふのである。そして筆者はその一因が上に述べた様な處にあるのではないかと思つてみた。勿論、一人の中心人物から出發して埋れた新人物を掘り出すことが傳記研究の重要な題目

であり、又研究者の魅力であることは自明である。しかしそのみを專にするため、反つて中心人物を掘り下げることが等閑に附されてはなるまい。上に傳記研究の危険と言つたのはさういふ意味なのである。敢て愚存を記して御參考に供しようとする所以もそこにある。たゞ文中著者に對して禮を失する所のなきやを恐れる切に寛恕を請ひたい。

要するに本書は、徒らに屋上屋を重ねる類書とは異つて、篤學な著者が堅實な勞作を淡々たる行文の中に盛つた好著である。その意味で、教養書として何人にも一讀を奨められる書であると同時に、史家が素材として活用すべき佳い基礎研究書でもあると思ふ。

續編の嗣出が早くも計畫されてゐる由、著者の一層の文運を祈つて止まない。(四六判、三二〇頁、定價一圓七十錢)(中井信彦)。

## 滋賀縣八幡町史

(滋賀縣八幡町發行)

滋賀縣八幡町は、近江湖東平野に位する人口僅か一萬餘の一小都會に過ぎないが、その國史上に占める意義は必ずしも然く僅少であるのではない。この町をその主たる郷土とする近江商人の近世經濟史上に於ける顯著な活動の跡を考へるだけでも、ひとは、此の町の重要な意義を察することが出来るであらう。今度、この町の詳密正確な歴史が主として福尾猛市郎氏の努力によつて編まれるに至つたのは、その意義極めて大なるものがあると思はれる。本書は、第一巻通説、第二巻志表、第三巻史料の三巻より成り、

それ／＼九七二頁、八三二頁、六四八頁の大冊で、地理に關する部分が京大地理學教室の吉田敬市氏、近江商人の近世北海道に於ける活躍に關する一章が近松文三郎氏の執筆になる外は、全て前記福尾氏の執筆にかゝると云ふ。

第一巻通説は、自然地理的諸環境の記述を巻頭に、上代より明治維新に至るまでの町史を五編に分けて取扱つてゐる。第二巻志表は、人文地理志、町政志、神社志、寺院志、民俗志、文藝志、災害・騒動志、人物志の八編と詳細な町史年表を収めてゐる。第三巻史料は、町史に關する主要史料を大體年代順に配列し、徳川時代については、之を政治、商工業、金融、運輸交通の四項に分類して収載してある。漢文で書かれた史料には一々句讀訓點が附せられてをり、且つ第一巻通説中の關係記事の條に、本巻所收の史料番號が註記せられてゐるのは甚だ便利である。

何分にも合計二千數百頁に上る大著であるため、全部を通讀する餘裕を有しなかつたが、一瞥するを得た歴史的部分についてだけ云へば、本書の達成せるところは頗る注目すべきものがあるやうに思はれる。本町の歴史は、既に中川泉三氏の名著「近江蒲生郡志」中に所々に於いて可成詳細に取扱はれてゐるのであるが、今それとこれとを比較するに、本書は其後の廿年間に近い時の経過にふさはしい進歩の跡を示すにあますところないやうに思はれる。例へば、今詳しく紹介してゐる餘裕のないのが遺憾であるが、第五編第二編の徳川時代に於ける本町の商工業を論じた部分の如き「蒲生郡志」の記載に比して量的に數倍するのみならず、よく尨大なる史料を消化して之に極めて整然たる體系を與へてゐる如

き、本書の白眉たるを失はないであらう。京大出身の新進史家福尾猛市郎氏の執筆にかゝるだけあつて、一小都會の商業史を主題としながらも近世商業史の本質的な諸問題に關する多くの示唆を提供してゐるのはさすがである。今日以後、近江商人又は近世の商業史を論ずる者は恐らく必ず本書のこの部分を參看するを要するだらうと思ふ。なほ、福尾氏には別に「近江商人の發生とその發展について」(史林、第二十二卷ノ一、二所載)なる好論文のあることを附記しておかう。

要之、本八幡町史全體を通じて、地方史のまゝ陥入り易い缺點たる視野の狹隘から美事に免れて、歴史の一般的な展開の論理と地方的な具體的史料との美事な綜合を示されてゐる點は、最近刊行せられた地方史中の最も優秀なものの一つとしてよいと思はれる。滋賀縣は從來、牧野信之助氏による滋賀縣史三卷、中川泉三氏の努力になる蒲生、愛智、坂田、等の諸郡志など數多くの優れたる地方史を生み出すことによつて我が國史學界に貢獻するところ極めて大であつたが、今又本書によつて錦上更に花を添へることになつたわけである。(昭和十五年一月五日)(渡邊基)

## 長安の春

(石田幹之助著  
創元社發行)

石田教授の「長安の春」がいよいよ裝を凝して新線と共に世に出た。東西交渉史研究の第一人者として夙に令名のある著者その人に關しては今更申上げるまでもなからう。本書に收むるところは「長安の春」「胡旋舞小考」「當城の胡姬」「西域の商胡」重價を